



Title	養生思想の展開とその公衆衛生的機能：健康文化形成のための理論的基礎
Author(s)	瀧澤, 利行
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/43016">https://doi.org/10.18910/43016</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	たき 瀧澤 利行
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学位記番号	第 14829 号
学位授与年月日	平成 11 年 5 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	養生思想の展開とその公衆衛生的機能 —健康文化形成のための理論的基礎—
論文審査委員	(主査) 教授 多田羅浩三 (副査) 教授 松澤 佑次 教授 森本 兼襄

### 論文内容の要旨

(目的) 本研究では、構造的転換が図られつつある公衆衛生活動における主体的かつ自己形成的な健康思想の分析と構築の一環として、健康思想の歴史的所産である「養生」に着目し、古代から近代までに日本で刊行された養生論を資料としつつ、その原理的意義を考察し、それが公衆衛生活動にいかなる理念を提供しうるかを明確にすることを目的とする。

(方法) 本研究は、平安後期から明治後期までの日本で著された「養生論」44編を主たる資料とし、古代中国の養生論および近代日本の公衆衛生、社会衛生に関する単行書、雑誌論文、報告書、法規、手引書その他の文書をも隨時検討しつつ、前記資料の記載内容を系統的かつ論理的に分析する方法によっておこなった。

(結果) 古代以降明治末年までの日本の養生論は、刊行時期から「古代・中世期養生論」「近世前・中期養生論」「近世後期養生論」「近代期(明治期)養生論」の4種に分類できる。その思想および内容の主たる特質は以下のようにまとめられる。

- 1) 古代・中世期養生論では、飲食、服薬、呼吸、医療体操(導引)・運動、性交の5種の内容に大別でき、とくに、飲食、服薬についての記載が多い。養生の原則としては「節欲」と「慎身」の推奨および「未病之治(疾病的罹患前の予防)」を基本としている。
- 2) 近世前・中期養生論では、内容全体がより体系化されてくる。前時期の内容に加えて、「総論・目的」に関する記載が充実し、「視聴覚言語」「排泄」「精神衛生」「養老育幼」などの項目が比較的高い比率で論じられるようになっている。
- 3) 近世後期養生論では、思想的基盤の多様化に即して、内容的にも多様化をとげ、各内容に記載が分散し、家政・道徳・文化・教養・利財などの項目が含まれるようになった。これらの内容的変化に応じて、「無病長寿」観や厳格な節制主義や鍛錬主義も相対化・寛容化され、人間の自然性を重視するようになった。
- 4) 近代養生論の内容は、個人の節制に関する事項と、環境に関する事項が重視されていた。養生の目的は、個人の健康の形成と維持を目的としつつ、「修己治人」観を基礎とする儒教的養生観と古典社会進化論にもとづいた「優

「勝劣敗」原理とが結合していた。

(考察) 結果に示されたように、養生思想は、古代から近代（明治期）にいたるまで、一貫して無病長寿と健康形成を目的とした個人の生活規範の集成として機能してきた。古代・中世から近世前期までの養生論は、専門的医療が大衆化されていなかった社会状況において一部の薬物療法などの治療的行為をその内容に含み、養生と治療とが未分化であった。これに比して、近世後期養生論では、医療・服薬に関する批判・注意についての記載が明確になされており、医療が養生的行為から相対的に区分されつつあった。その反面で、近世後期養生論においては、それまでの養生論では明確に意識されていなかった倫理・道徳や文化・教養あるいは家政・利財などの生活形成や人間形成に関する機能を含むようになっている。この時点で、養生論の本質は大きく変容はじめた。それは、健康と長寿のための思想から、健康を生活課題の中核としながら、自らの生活手段や生活様式を課題達成にむけて主体的・自律的に規整していく過程で主体としての人間自体を形成していく思想への転換であった。近世前・中期養生論から近世後期養生論への移行において、その目的観が「無病長寿」指向から現状容認的な健康観を選択しつつあったことは、現代社会に要請されている現状容認的かつ漸進改良的な健康観を先取しているとみられる。

養生論がもついま一つの意義は、健康概念を各時代ないし各地域の文化内容にいかに主体的かつ創造的に関与するかという文化的視点から理念化している点である。特定の文化構造のもとで健康の理想像を追求するいわば「文化的健康」の観点は、養生論における重要な特徴であると解しうる。その点において、養生論は現代の健康に関わる総合的文化としての「健康文化」を構築するうえでのきわめて重要な理念的基礎ととらえられる。

(総括) 養生思想とそれにもとづく公衆衛生思想は、自らが必要なケアの本質を学びつつ、歴史性や文化性、地域性を基礎として自己形成的・創造的にケアを構成して、自己のケアと社会・文化の形成とをライフサイクルの各位相において常に統合的にとらえる「健康文化」の理念的基礎となりうる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、健康思想の歴史的所産である「養生」に着目し、古代から近代までに日本で刊行された養生論を資料としつつ、養生思想の原理的意義を考察し、それが公衆衛生活動にいかなる理念を提供しうるかを明確にすることを目的としている。本論文では、平安後期から明治後期までの日本で著された「養生論」44編を主たる資料とし、刊行時期から「古代・中世期養生論」「近世前・中期養生論」「近世後期養生論」「近代期（明治期）養生論」に分類し、その記載内容を系統的かつ論理的に分析し、思想的特徴を明らかにする方法をとっている。その結果、内容の主要項目は総論的内容から文化・教養、家政・利財までの22項目に分類できること、またその内容が古代・中世から近世後期（19世紀前期）にかけて、多様化し、その実践規範も寛容化していることを示している。さらに、明治以降の近代期養生論では、個人の健康の形成と維持を目的としつつ、儒教的養生観と古典社会進化論にもとづいた養生思想に変化していることを明らかにしている。この結果から養生思想は、古代から近代にかけて医療行為から区分される、健康形成を目的としたセルフケア論として位置づけられるとともに、生活形成論・人間形成論としての側面を有することを明らかにした。

以上の知見は、日本における養生思想の展開を歴史的観点から明らかにするとともに、これまでの保健医療において通念とされてきた受動的ケアに対し、自らが必要なケアの本質を学びつつ自己形成的・創造的にケアを構成していく新しいケア理論を構築する際に有益といえる。また、近年の公衆衛生学の領域において議論されている社会・文化の形成と健康増進とを統合的にとらえる総合的文化としての「健康文化」の理論的基礎となりうることを示したものであり、学位の授与に値するものと考えられる。